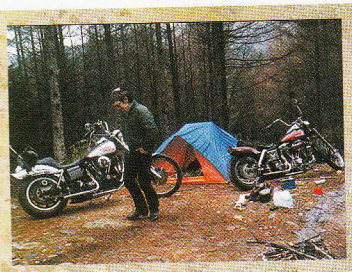
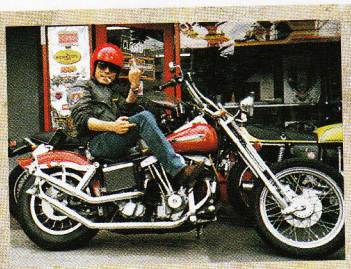
生きてきた時代に合ったスタイルだよ。
一所懸命ムキになって、
自分でカッコいいと思ったものを信じて。





QUARTER CENTURY OF
バイカー四半世紀
THE BIKER'S WORLD

ニューでもオールドでもない。俺にとってはライフスクール。

Photo : Kosuke Kawai　Report : James Sekijima

「楽しくなけりゃやってらんないって」

インタビューも終わりにさしかかった頃、小川氏の口から出た言葉だ。長年カスタム屋として続けてこられた秘訣は…という問いに対するひとつの答えだった。それは同時に、ミーティングやカスタムショーの会場でジャパドラを見かける時に感じる、あの雰囲気の秘密でもあった。

小川氏が初めてハーレーを購入したのは'80年。当時上野のバイク街にある普通のバイク屋で働いていた小川氏は、バイク屋の形態としてこれは自分の夢見ていたものと違うと感じつつ、同時にその'79年式FXSを夜な夜な路上で「もう修理なんてもんじゃない。動くように」する日々を送っていた。なまじバイク屋で働いていることもあり一通りの国産車は乗ってきた小川氏だけに、そのひたすら壊れまくるハーレーの有り様は、まさに「信じられない」ものだった。

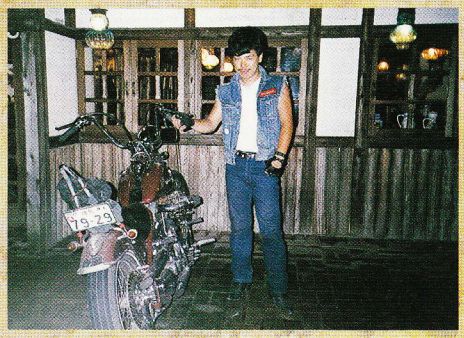
「なんでこんな未完成のものが世界のハーレーなんだって。要はそんなにあちこちイカレるバイクって、乗ったことがなかったからね。世界一贅沢なもんって当時は言われてたから。キャデラック、ハーレーみたいな。それがすごいショックで。だから間違えちゃったかなって思う反面、ムキになって動くように……」

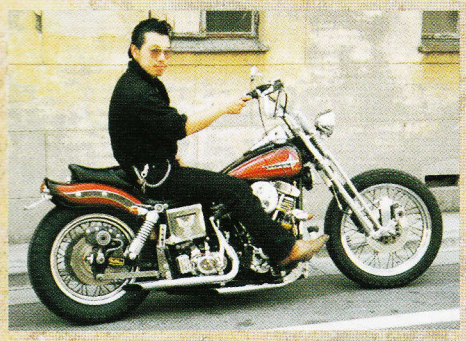
そうなってくると、これだったら店にしちゃった方がいいな…自分たちのためにも…と考え始めるまでにそれほど時間はかからない。しかし'81年春、今のジャパン・ドラッグ・カスタム・サイクルズ（以下JDCC）の前身「ジャパン・ドラッグ・サービス」は、東京上野のバイク街の外れで産声をあげたのだった。

まさかそれから四半世紀以上過ぎた現在までもその職業に就いているなどとは思いもよらず、ましてや今のハーレーを取り巻く環境など想像

小川泰良
来年3月でハーフセンチュリー＝50歳。埼玉県川越市にある『JAPAN DRAG CUSTOM CYCLES』代表。作り手としての欲求はますます盛んになる一方で、そのワクに囚われない独自の美学にファン多し。

とにかく楽しそうな小川氏の写真。こんなところにもJDCCの原点を見ることができるのである。下の写真2枚は'81年、JDサービス時代のツーリング風景。一番下右はジャマー日本1号車と共に。他の写真からは自身のバイクを教材にした小川氏の変遷が見て取れる。





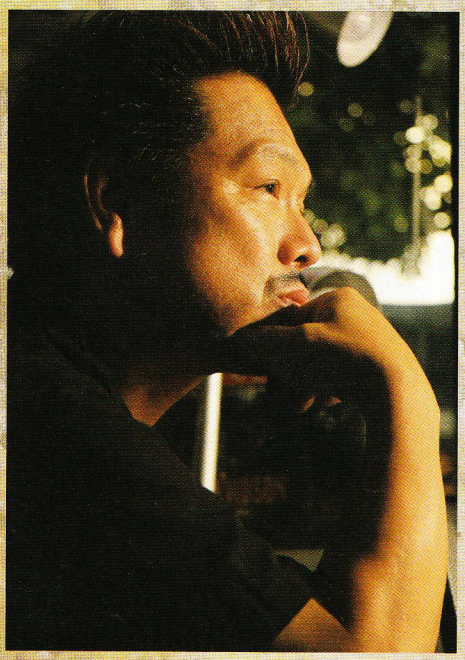
だにできずに、ただただムキになってハーレーと格闘し続けた20代前半のあの頃。それは同時に、いまや大御所と言われるビルダーたちが、各地で同じように一所懸命ハーレーと向き合っていた頃でもある。小川氏は言う。

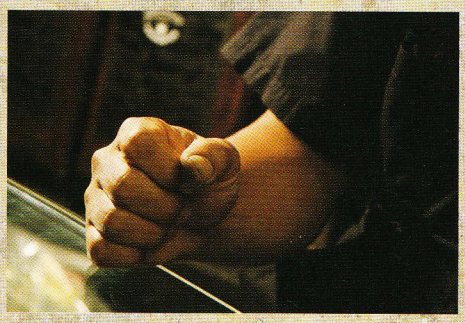
「もうみんなで一所懸命やっていたらだんだん受け入れられて裾野が広がってってくれたんだって、継承されていったんだっていう自負はあるよ。僕らがムキになって雑誌とかに出ていなければ、今はどうなったんだろう…わかんないけどね。だからやっぱりそういう意味じゃそういう世代ですよ。若者がハーレーをなんとか買って足代わりに乗ってみせちゃう、そしてそういう現実がカッコいいっていう今の文化なんて、考えたこともなかったし、考えられるはずもなかったしね。よくオールドスクールですね、ニュースクールですねとかって言われるんだけど、僕にとってはライフスクールなんだよ。ニューでもオールドでもなく、ただただ生きてきた時代に合ったスタイルだから。僕が自分でカッコいいなぁと思ったものを信じて、あとその当時手に入り得る部品ってのがあるから、それを使用すると必然的にその時代背景に合ったものになるのかもしれないよね」

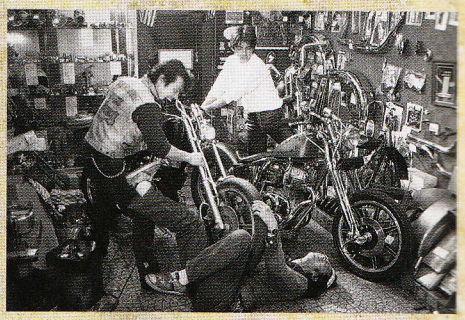
情報など皆無に等しく、すべてを自分の頭と腕で作り出さなければならなかった世代。そしてそんな苦労も苦労とは思わず、「好き」で「楽しい」からこそ乗り越えてこられた世代。冒頭に記した「楽しくなけりゃやってらんない」は、四半世紀の間に何周もして最終的にたどりついた境地のようなものなのではないだろうか。

さてそんな小川氏だが、実はジャパン・ドラッグ・サービスが消滅した後数年「バイク屋じゃなくバイク乗りだった」時期がある。「もう乗

秘訣はお客さんと楽しみつつも、スタンスをお互い自覚しあうこと。それで生活が成り立っているんだから。







りまくってた」「峠も攻めたし、ツーリングも行ったし、テントだけで全国を練り歩いてたし、お金もないし、そんなホント貧乏バイカーのはしりだよね。なんだこいつ、みたいな思われ方をしてたよね。汚ねぇカッコしてさ」という、まさに今で言うバイブズ的なバイカー時代。今回ここで紹介している写真の多くがそんな80年代半ば～後半にかけてのものが多いのも、そんな理由によるものだ。楽しさ満点の写真たち。そしてその当時の楽しかった経験が、「勝手でわがまま」と自身のカスタムの方向性を分析しつつも、決して乗る人のことを棚に上げないJDCCのやり方の根幹にあるのも間違いない。

「偉そうなことを言う立場でもないんだけどあえて言わせてもらえば、長く続ける秘訣ってのは、お客さんと楽しむこと。僕なんかお客さんとバイク作りあげる過程がものすごく楽しいもん。その上でスタンスをお互い自覚しあってやっていくのが大事だよね。それで生活が成り立っているんだからね」

背中に描かれたSINCE1981の文字。楽しく厳しいプライドが、その数字からは滲み出しているようである。